

過去の事柄に対して用いられる 前未来について

太 治 和 子

1. 前未来の基本概念

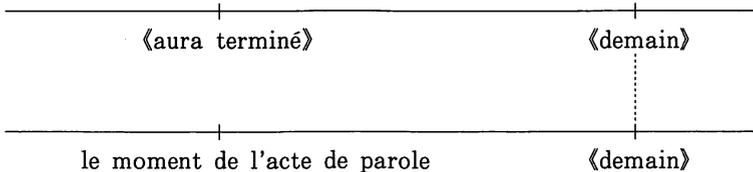
前未来とは、未来にある基準点で完了している事行を表わす時制である。従って、事行そのものは未来にあっても現在にあってもさらには過去にあってもよく、そもそも発話時点との時間的前後関係を一切問わない時制であることはすでに述べた¹⁾。

Portine²⁾ は、2本の時間軸を用いてこの点を説明する。

(1) A-t-il fini le compte-rendu qu'on lui a demandé?

— Je n'en sais rien, mais ne t'inquiète pas!

Il l'aura terminé demain.



(1)の《aura terminé》は、未来にある基準点《demain》で完了していればよく、発話時点での状況——もう既に書き終えたのか、今まさに書き終えるところなのか、あるいはこれから明日までに書き終えようとしているのか——についての情報は一切与えられない。このように、発話時点が含まれる時間軸上の一点に、《aura terminé》が起こる時点を固定化することはできない。

しかし、文脈によって《aura terminé》を発話時点よりも未来の側に

位置付けることは可能である。

(2) (= (1')) A-t-il fini le compte-rendu qu'on lui a demandé?

— Non, pas encore, mais ne t'inquiète pas!

Il l'aura terminé demain.

《pas encore》という語があるために、《aura terminé》は必ず発話時より後に起こることになる。

同じように、《aura terminé》を過去の側に位置付けることも可能であろう。

(3) (= (1')) Il l'aura sans doute terminé hier.

過去を示す語《hier》を置くことによって、(3)の文は過去の事柄を表わす文になる。この場合の未来基準点は文中には明示されてはおらず、《on verra que》＝「いずれ彼に尋ねてみればその時にはわかるだろう」といった文が省略されておりこれが未来基準点になっていると考えられる。次に、過去を表わす語と共に用いられた前未来の実例を挙げる。

(4) Hier, à Verrières, on aura demandé un délai de trois jours pour réfléchir; [...]

(Stendhal, *Le Rouge et le Noir*, p. 83)

(5) [...] ce mot est la réponse à une question que vous lui aurez faite il y a quatre jours; [...]

(Diderot, *Le Neveu de Rameau*, p. 96)

本来発話時点との時間関係を一切示さない前未来が過去の事柄に対して用いられる際には、発話者は発話時点ではなく未来のある時点に立って語っていることになる。本稿では、まず前未来の本来の用法を分類しまとめた上で、その中のいくつかが後で述べる回想・評価や推測といった過去の事柄を示す用法へと繋がっていくメカニズムを明らかにしたい。その上で、実例を引きながらこれらの用法を詳細に調べていくことにする。

2. 前未来のさまざまな用法

2. 1. 明示された未来基準点を持つ本来の用法

前未来の用法の最も基本的なものは、未来時を示す状況補語と共に用いられてその時点で完了している行為を表わすものであろう。

(6) — Combien de temps réclames-tu?

— Demain, j'aurai terminé.

(Ch. Jacq, *Ramsès*, III, p. 230)

(7) Dans quinze ans madame de Rénal adorera mon fils, et vous
l' aurez oublié. (Le Rouge et le Noir, p. 466)

(7)では、未来時点《Dans quinze ans》における未完了継続行為は単純未来《adorera》で、完了行為は前未来《aurez oublié》で表わされている。

《quand》, 《lorsque》, 《dès que》, 《après que》といった接続詞(句)と共に用いられ、主節の単純未来(もしくは近接未来等)の動詞が未来基準点となり、それより以前に終了する行為を表わす前未来の例も多く見られる。

(8) Je vous répondrai, [...], quand vous aurez tué un homme en
duel, [...] (Le Rouge et le Noir, p. 297)

(9) Eh bien! j'irai dès que mon médecin sera venu.

(Balzac, *Le Père Goriot*, p. 354)

(10)のように、主節の動詞の方が前未来に、従属節の動詞の方が単純未来に置かれることもある。

(10) Quand vous me verrez [...], mon père aura changé d'humeur.

(Balzac, *Splendeurs et Misères des Courtisanes*, p. 136)

副詞《bientôt》, 《vite》, 《promptement》などと共に用いられて行為が短時間に完了するであろうことを表わす前未来の例もある。

(11) [...] nous aurons bientôt terminé.

(Marivaux, *L'Heureux Stratagème, Théâtre*, II, p. 75)

あるいは、espérer que の後で用いられる前未来の例もある。

(12) J'espère que M. le Comte aura fait de bonne besogne.

(Collé, *Le Galant Escroc, Théâtre du XVIII^e siècle*, II, p. 669)

また、手紙の中で、「この手紙を受け取る頃にはもうご存じのこととは思いますが」といった相手の立場に立って述べられた前未来の例もある。

(13) 《Vous avez appris avec une joie, [...], les événements qui ont porté ma famille à m'enrichir. [...]》

(*Le Rouge et le Noir*, p. 442)

ところで、単純未来（あるいは命令文）と共に用いられてはいるが、(8), (9), (10) のような時の接続詞を伴わないものも多数ある。この用法は、実は後で取り上げる回想・評価や推測の用法に拡大していくものであり、そのメカニズムを知る上での手がかりとなる。

(14) Adieu, je reviendrai savoir ce qu'ils vous auront dit.

(Marivaux, *Le Petit-Maître corrigé, Théâtre*, II, p. 194)

(15) Je ne serai pas un ingrat envers ceux qui m'auront aidé à prendre le pouvoir. (*Ramsès*, II, p. 351)

(16) [...] gardez-vous de parler jamais de ce que vous avez vu et entendu ici. (Hugo, *Notre-Dame de Paris*, p. 355)

前未来の動詞は、主節の動詞が示す未来時点で既に完了している事柄を表わしており、一種の時制の一致の用法である。

(17) Dieu vous tiendra compte et de ce que vous avez dit, et de ce que vous vous serez abstenu de dire.

(Marivaux, *La Vie de Marianne*, p. 248)

ところが、(17)では、ce que の後の二つの動詞のうち一方は複合過去に置かれ、もう一方は前未来に置かれており、主節の単純未来の動詞への時制の照応だけでは説明できない。《avez dit》=「あなたが言ったこと」を話者は知っており、したがって話者の発話時点を基準にして複合過去で述べられているのに対し、《vous serez abstenu》=「あなたが言わなかったこと」については話者は正確には何も知ることができないのであるから、「あなたがいずれ死んで神の御前で裁きの時を迎えた時に神のみが知り給

うであろうこと」といった意味で主節の単純未来の動詞の方を基準点として述べられているのであろう。このように、複合過去の基準点が発話時点にあるのに対し、前未来は常に何らかの未来の基準点を持つ時制であることをこの例はよく示している。

ところで、前未来が *que* の後ではなく主文の中に独立して現れることもある。

(18) Mais vous ne partirez pas. Je le vois. Du moins vous aurai-je prévenu. (Malraux, *La Condition humaine*, p. 163)

ただし、前文の中に単純未来の動詞《(ne) partirez (pas)》がありこれが未来基準点となる。「あなたはきっと出発しないんでしょう。でも、その前にあなたに警告だけはしましたからね」という意味で、警告したのは過去のことではあるが、《(ne) partirez (pas)》を基準点として語られていることになる。

(19) Avant quinze jours, reprit-il, le gouvernement Kuomintang interdira nos sections d'assaut. [...] Désarmer la garde ouvrière: ils auront la police, le Comité, le Préfet, l'armée et les armes. Et nous aurons fait l'insurrection pour ça.

(*La Condition humaine*, p. 126)

(19)も同様で、暴動は過去に起こったものだが、前文にある《Avant quinze jours》や《interdira》, 《auront》が基準点となって「その時にはそうした結果をもたらすために暴動を起こしたようなことになってしまうだろう」といった、一連の事件の終了後に立っての一種の評価を表わす文になっている。

(20) Tu ne veux pas parler. Nous allons voir. Tu l'auras voulu!

(Gracq, *Le Rivage des Syrtes*, p. 155)

(20)では、前文に近接未来《allons voir》がある。《Tu l'auras voulu》の《l'》は具体的には笞刑を指し、これからはじまろうとしている。もし既に始まっていたなら《Tu l'as voulu》と複合過去で述べられていたと思われる。

(21) De grâce, silence, Messieurs, [...]; si nous disputons encore, il aura été inutile de faire entrer M. Sorel.

(*Le Rouge et le Noir*, p. 377)

(22) Mais s'il [=votre petit ami] ne vous revient pas, dit-il, vous aurez tout perdu pour rien...

(Sagan, *Un peu de Soleil dans l'Eau froide*, *Œuvres*, p. 599)

未来の基準点は(21)や(22)のようにsi節で表わされることもある。(22)は、「あなた」はもうすでに友人も仕事も世間の評判も全て失ってしまっているが(過去の事実)、「もし彼があなたのもとに戻ってこなかったらその時には」(未来の基準点)、「全てを無意味に失ったことになるのですね」(前未来の文《vous aurez tout perdu pour rien...》)という意味である。

このように、時として前未来は、未来時点に視点を移して過去の事柄を語るのに用いられる。そして、次の章で取り上げる回想・評価用法も実は、未来基準点が明示されないだけでその構造は(18)から(22)と同じであると考えられる。

次の例も、主節の動詞が単純未来におかれている。

(23) Vous verrez peut-être que, selon lui, ce sera moi qui aurai voulu le tenter pour l'engager à me faire du bien, [...]

(*La Vie de Marianne*, p. 242)

ただし、「私」が彼を誘惑したととられる恐れのある行為はすでに過去のことである。《Vous verrez》に一致して que 以下の動詞は単純未来および前未来に置かれている。

(24) Vous verrez que la lettre aura passé par ce trou-là. Attendez, attendez, j'oubliais une poche; la voilà. Non; peut-être que je l'aurai oubliée à l'office, où j'ai été pour me rafraîchir.

(Marivaux, *Le Prince travesti*, *Théâtre*, I, p. 386)

最初の前未来動詞《aura passé》は(23)と同じように主節の《Vous verrez》に一致しての前未来であり、(問題となっている手紙は今手元に無い

ことから)手紙が落ちたとすればこれも過去の事柄であるはずである。ところが、二つ目の前未来動詞《aurai oubliée》の方は《vous verrez que》の後に続く節中にはなく、主節の動詞への時制の一致からでは説明できない。しかも手紙を忘れたとするならこれもまた過去のことであるはずである。どちらの前未来の動詞も失った手紙の原因を述べていることから、内容的にもこの二つの動詞は密接な繋がりがあると思われる。そこで、《aurai oubliée》の前では《Vous verrez》が繰り返しを避けるために省略されており、《aurai oubliée》はこの省略された基準点での完了を表していると考えられないだろうか。そうだとすれば、これは後の推測用法に関わってくる重要な実例となる。

(25) [...] je n'irai pas troubler le sommeil du bon vieillard; probablement il aura oublié jusqu'à mes traits, six ans font beaucoup à cet âge! je ne trouverai plus que le tombeau d'un ami!

(Stendhal, *La Chartreuse de Parme*, p. 220)

(25)の《il aura oublié》は、複合過去《il a sans doute oublié》で言い換えることはできない。なぜなら、前後の文の中に単純未来の動詞があり、「彼に会いに行ったならその時には」といった未来の時点に立っての発話、すなわち、「その時には私の顔も忘れてしまっているかもしれない」という意味で用いられているからである。

このように、前未来の動詞が表わしている行為そのものは過去の事柄であっても、前未来が未来の基点に立っての完了時制であることに変わりはない。無く、(23)、(24)、(25)のいずれも「時がたてばやがて明らかになるだろう」といった意味で過去の事行を示していることになる。

2. 2. 過去の事柄に対して用いられる前未来

過去の事柄に対して用いられる前未来には、回想・評価用法と推測用法の二つがある。2.1.の本来の用法と比較検討しながら実例を見ていきたい。

2. 2. 1. 回想・評価用法

これは、Wagner と Pinchon が《*rétrospectif*》³⁾、Clédat が《*appréciatif*》⁴⁾、佐藤正明が「発話者の個人的評価を示す前未来」⁵⁾、Wilmet が（次の推測用法を《*restrictif*》と呼んだのに対し）《*expansif*》⁶⁾ と呼んだものを指す。死や、人生の一大転機となるような事件を前にして、あたかも全てがもう終わってしまったかのように時間を先取りし、そこからこれまでのことを振り返って回想する用法である。先にも述べた通り、未来にある基準点が明示されていないだけで基本的構造は(18)から(22)の用例と同じである。

(26) Si cette idée était vraie, je n'y survivrais pas. Eh quoi! j'aurai travaillé pendant quarante ans de ma vie, j'aurai porté des sacs sur mon dos, j'aurai sué des averses, je me serai privé pendant toute ma vie pour vous, [...]

(*Le Père Goriot*, p. 298)

(27) Elle soupira; et, après un long silence:

— N'importe, nous nous serons bien aimés.

— Sans nous appartenir, pourtant!

(Flaubert, *L'Éducation sentimentale*, p. 449)

(28) 《Combien de temps aurai-je vécu ici? Cinq mois, six?》 et elle ferma les yeux. 《Et avec cet homme qui respire tranquillement près de moi, deux ans et demi, trois ans? [...]》

(Sagan, *Les Merveilleux Nuages*, *Œuvres*, p. 390)

(26)では、条件法の文《*je n'y survivrais pas*》が契機となって、Goriotの想いは自分の死（未来の基準点）へと跳んでいく。「もしそんなことになったなら自分の人生とは何と無意味であったことになるだろう」といった抗議の気持ち、悔いや恨みといったものがそこにはこめられている。(27)、(28)は愛する人との別れの場面である。既に二人の関係が完全に終わってしまったかのように時間を先取りして語ることにより、絶望、諦め、悲哀といった文体効果を伴うことになる。

(29) Comment! ici, dans ma propre maison, chez moi, quelqu'un
aura pris ton or! le seul or qu'il y avait!

(Balzac, *Eugénie Grandet*, p. 197)

(29)の中で、話者は盗難の事実を現時点で認めることを拒否し、「よもやこんなことが我が家で本当に起こる日が来ようとは」といった憤慨や苛立ちをこめて未来を基点とする完了時制で語っている。

このように、回想・評価用法では結果としてさまざまな文体効果を伴う。発話者が複合過去ではなく前未来を選択する時の理由の一つはここにあると思われる。ただし、前未来という動詞の時制そのものにそういった感情的用法があるわけではない。前未来は常に明示あるいは暗示された未来時点での完了を示しているにすぎない。

2. 2. 2. 推測用法

(23), (24)の中で、主節の動詞《verrez》は que の後の文の内容が過去のことであったとしても前未来の動詞を従えることを確認した。また(24)の後半部分や(25)のように、この《vous verrez que》が省略されることもあった。

次に、過去の事柄に関する推測用法の例を挙げる。

(30) Je viens donc de tomber à mon insu dans quelque action qui
 vous aura déplu? (Le Rouge et le Noir, p. 423)

(31) Votre amoureuse vous aura fait cadeau de l'uniforme que vous
 portez [...]. (La Chartreuse de Parme, p. 64)

いずれの例も文脈から前未来の動詞が過去のことを表わしているのは明らかである。しかしながら、これらの文の中には未来基準点となるような語句は全く存在しないように思われる。

次の(32)は、abbé Prévost が、初版の中で《se sont sans doute servis》だったものを、1753年になって《se seront servis》と書き直した部分である。

(32) M. de B...., [...], est un homme qui fait de grosses affaires,

et qui a de grandes relations; les parents de Manon se seront servis (←se sont sans doute servis) de cet homme pour lui faire tenir quelque argent. Elle en a peut-être déjà reçu de lui; [...]

(Prévost, *Manon Lescaut*, p. 29)

ところが、《a peut-être (déjà) reçu》の方は、前未来に修正されることなくそのまま残されている。いずれも過去の事柄の推測を表わしていると思われるが、なぜ作者は一方の動詞だけを前未来に修正したのだろうか。

(33) — On m'a volé mon portefeuille!

— Mais voyons, c'est ridicule! ... Tu l'auras sans doute oublié à la maison ... ou peut-être l'as-tu perdu?

— Non, on me l'a volé, j'en suis sûr!

(*Les Aventures de Tintin: Le Secret de la Licorne*, p. 2)

引用文(33)の中でも、紛失した財布をめぐる最初は前未来、続いて《複合過去+peut-être》で過去の推量が述べられている。前未来の基本概念は未来時における完了であるから、なんらかの未来基準点が設定できなければならないはずである。(24)や(25)のように《vous verrez que》が省略された文だとすれば、話者は現時点ではまだ確信の持てない過去の事柄に対して、断定を差し控え判断を未来に先延ばしにしつつ態度を保留していると考えることができる。Manon と M. de B. の関係についてはいずれ話者の家族や友人から事実を告げられることになるであろうし(32)、家に置き忘れた財布は帰宅すれば見つかるであろうが(33)、Manon が実際にお金を受け取ったかどうか、あるいは「君」が財布を落としたかどうかについては時間がたてばいずれ明らかになるような性質の問題ではない。次の例は、現時点での断定を避けた語調緩和の前未来である。

(34) — Il vient vers nous.

— Tu auras mal vu ... Regarde mieux.

(*Ramsès*, I, p. 369)

ところで、この推測用法の用例数は非常に多く⁷⁾、中には次のように《vous verrez que》、《on s'apercevra que》とパラフレーズするだけ

では説明できないものも多く存在する。

- (35) [...] mais l'homme dont j'ai été obligée de me servir pour faire porter mes hardes ici est de son quartier [de Mme Dutour]; ce sera lui qui le [=le nom du couvent] lui aura appris, et puis M. de Valville, [...], a sans doute interrogé cette bonne dame, qui n'aura pas manqué de lui apprendre tout ce qu'elle en savait.

(*La Vie de Marianne*, pp. 181-182)

- (36) Un démon de cette envergure sait se dissimuler avec un art consommé. Peut-être l'as-tu déjà croisé; il t'aura paru aimable et inoffensif. (*Ramsès*, II, p. 275)

(35)や(36)の中の前未来と複合過去の混在を、これまでのような省略法の考え方から説明することは不可能である。

前未来が用いられる際にはなんらかの未来基準点が必要であったが、やがて話者はその基準点の存在を意識するのを止め、一部の用法を固定化してしまったのかもしれない。あるいは、佐藤正明⁸⁾や Yvon⁹⁾などが指摘するように、未来時制とはそもそも推量の形であったのかもしれない。いずれにしても、前未来の推測用法は時制的意味からだけでは説明できないと思われる。また、フランス語の推測用法の前未来は英語では《must have + 過去分詞》で訳されることが多いが、これも上記の点からみて非常に示唆に富むと思われる。

- (37) (= (33)) You must have left it at home... or perhaps you've lost it?

(*The Adventures of Tintin: The Secret of the Unicorn*, p. 2)

最後に、推測用法と回想・評価用法は常に明確に区別できるわけではないことを指摘しておく。特に新聞などにおいては、現時点での断言を差し控え、いずれ事態がはっきりするであろう未来の時点へと最終判断を保留した形での評価の用法が多い。下にその代表的な実例を挙げておく。

- (39) Rarement un premier ministre aura été aussi mal élu et aura

pris ses fonctions dans un tel climat de scepticisme sur ses capacités. Keizo Obuchi est devenu le vingt-troisième premier ministre du Japon [...]

(*Le Monde hebdomadaire*, N° 2596, 1998. 8. 8. 4面)

3. 結論

前未来とは、明示あるいは暗示された未来の基準点での完了行為を表わす時制であって、発話時点との時間的前後関係については何も示さない。したがって、過去の事柄について用いられる前未来もなんらかの未来基準点を補うことによって、本来の用法の延長であると考えることができる。前未来の本来の用法の中には、回想・評価や推測の用法へと繋がるような中間的な実例がいくつかあり、それらを詳しく分析することで過去の事柄に対して用いられた前未来のメカニズムを明らかにすることができた。ただし、発話時に既に完了している行為に対し未来の基準点を設定して発話する際には、なんらかの動機・理由が必要であろう。回想・評価用法では、結果としてさまざまな感情的文体効果を伴い、推測用法では、現時点での断言を避け最終判断を保留するといった発話態度が見られた。

なお、推測用法については前未来の時制的意味からだけでは説明不可能であること、過去の推量を表わす表現の一つとしていわば固定化していることがわかった。今後の課題として、同じように過去の推量を表わす条件法過去と前未来との相違点を明らかにし、その使い分けを調べてみたいと考えている。

(本学非常勤講師)

注)

- 1) 拙著、「Beauzée の時制論—前未来について」、『仏語 仏文学』, 23号, 関西大学仏文学会, 1995, pp. 11-26.
- 2) H. Portine, 《Beauzée et le futur antérieur: Les axes du temps》, *Histoire Epistémologie Langage*, 18, 1996, p. 16, p. 19.
- 3) R. L. Wagner et J. Pinchon, *Grammaire du français classique et moderne*, 2e éd., Hachette, 1962, p. 351.

- 4) L. Clédat, 《L'antérieur au futur》, *Revue de philologie française et de littérature*, 20, 1906, pp. 265-282.
- 5) 佐藤正明, 「発話者の個人的評価を示す前未来」, 『フランス語学研究』, 28号, 日本フランス語学会, 1994, pp. 1-13.
- 6) M. Wilmet, *Etudes de Morpho-Syntaxe verbale*, Klincksieck, 1976, pp. 41-60.
- 7) 例えば, A. Dumas, *Le Vicomte de Bragelonne* の中では, 前未来総数 188例のうち48例が過去の事柄に対する推測用法であった。
- 8) 佐藤正明, 《Apropos du futur antérieur de conjecture》, 『東北大学文学部研究年報』, 44号, 1995 (1994年度), pp. 268-292.
- 9) H. Yvon, 《Indicatif futur antérieur, ou Suppositif probable d'aspect composé?》, *Le français moderne*, 21, 1953, pp. 169-177.

調査文献

- Balzac, *Eugénie Grandet*, Garnier, 1983.
- *Le Père Goriot*, Gallimard, Folio, 1991.
- *Splendeurs et Misères des Courtisanes*, Gallimard, Folio, 1992.
- Diderot, *Le Neveu de Rameau*, Garnier-Flammarion, 1967.
- Dumas, (A.), *Alexandre Dumas illustré*, J.-C. Lattès, 1988.
- Flaubert, *L'Éducation sentimentale*, Gallimard, Folio, 1981.
- Gracq, *Le Rivage des Syrtes*, José Corti, 1981.
- Hergé, *Les Aventures de Tintin: Le Secret de la Licorne*, Casterman, 1979.
- *The Adventures of Tintin: The Secret of the Unicorn*, Casterman, 1974.
- Hugo, *Notre-Dame de Paris*, L.G.F., Le Livre de Poche, 1972.
- Jacq, (Ch.), *Ramsès*, I (1995), II (1996), III (1996), R. Laffont.
- Malraux, *La Condition humaine*, Gallimard, Folio, 1981.
- Marivaux, *La Vie de Marianne*, Garnier, 1982.
- *Théâtre complet*, I (1980), II (1987), Garnier.
- Prévost, *Manon Lescaut*, Garnier, 1980.
- Sagan, *Œuvres*, R. Laffont, Bouquins, 1993.
- Stendhal, *La Chartreuse de Parme*, L.G.F., Le Livre de Poche, 1983.
- *Le Rouge et le Noir*, Gallimard, Folio, 1993.
- Théâtre du XVIII^e siècle*, II, Gallimard, B. de la Pléiade, 1974.